

哲 学

基礎科目 / 4 単位 / TM 授業

担当教員 栗栖 照雄 (テキスト・メディア担当)

■使用テキスト 栗栖照雄 (編著)『資料でたどる西洋哲学史—古代ギリシア神話から現代テクノロジーまで』九州保健福祉大学通信教育部

◆参考テキスト

講義概要・一般目標

「社会福祉」に関する研究は、人間と社会の関係様態を概念規定し、それを人間・社会の本質構造に即して解釈し基礎づけることを任務とする。こうした研究において哲学が果たす役割は、人間・社会の本質構造そのものを規定することである。哲学の場合、その規定に際して、先ず人間・社会の「存在」の意味を明確にし、「存在」を理解する「知」の様式を自覚しなければならない。この「存在」と「知」の先行的理解の視野の中で、人間・社会の本質構造が規定される。したがって哲学は、本質構造を規定する前に「人間とは何であるか?」、「社会とは何であるか?」という「根本的な問い」の前に立つ必要がある。本講義の内容は、この「根本的な問い」の、古代ギリシアから現代に至るまでの、西洋における展開の歴史である。

第一課程では、神話による人間の知の本質理解から、方法的自覚を伴う哲学知(知恵)の探求とアリストテレスによる哲学知の体系化に至るまでの、古代ギリシアにおける哲学誕生の道筋を辿る。

第二課程では、ヘレニズム時代における古典哲学の体系化、古典科学の活動、古典医療と古典天文思想の成立、キリスト教の発生と中世における展開、ルネサンスと宗教改革における近代への胎動まで、西洋の哲学知の科学のおよび宗教的展開の端緒を見てゆく。

第三課程では、ガリレオからニュートンまで近代科学誕生の経緯を辿り、次いで、近代科学を基礎づけるデカルトからカントまでの哲学的営みと、ヘーゲルによる近代哲学の形而上学体系化の試み、ニーチェによる「力へ意志」の思想まで、西洋哲学の成熟期を見てゆく。

第四課程では、イギリスにおける経験主義・実証主義の展開と、功利主義・プラグマティズムの発生を通覧し、その系譜から現代論理学が生まれる経緯を辿る。また、「存在」・「知」に関する現代の総合的吟味といえる科学哲学と現象学の試みを見てゆく。

到達目標

- 1) 古代ギリシアにおける哲学の始まりを、ポリスの成立、神話の形成、世界の成り立ち、真の知への関心、という古代ギリシア民族固有の伝統と、関連づけて説明できる。
- 2) ヘレニズム期における諸思想について、ストア学派とエピクロス学派の哲学、エウクレイデスの数学、アルキメデスの静力学、ガレーノスの医療思想、プトレマイオスの天文学、及びヘブライの神観念とキリスト教信仰の理解を通して、説明できる。
- 3) ルネサンス・宗教改革を経て近代科学が成立する「科学革命」について、ガリレオ、デカルト、ニュートンの思想の展開の理解を通して、説明できる。また、「科学革命」後に展開する数学的理性の自己批判の内容を、デカルト、ライプニッツ、カント、ヘーゲル、カントの思想の流れに沿って説明できる。
- 4) 18世紀から20世紀にかけての人間と自然に関する思想を、経験主義、功利主義、プラグマティズム、論理実証主義の発生と展開、及び19世紀末に生まれた現象学、実存哲学、現存在分析論の流れを通して、説明できる。

評価方法

T部分：科目単位認定試験により評価。

M部分：提出レポートにより評価

学習指導

第一課程 古代ギリシアにおける哲学の誕生

第一節 知の原初的形態としてのミュトス

【プロメテウスとエピメテウス】

この節のポイント

人間の知が先知（プロメテウス）と後知（エピメテウス）の組み合わせによって成り立つことと、そうした成り立ちによって、人間の知が虚偽と傲慢に陥って禍を招く危険な性格をもつことを理解する。

第二節 アルケーとエピステーメー

【アルケー・エピステーメー・ピュシス】

この節のポイント

それらの相互の関係を知の能力と責任に関連づけて理解する。

第三節 魂と数学的知

【魂の浄化と数学・学習】

この節のポイント

〈根源的学習〉の意味を理解し、ギリシア語源を通して、〈学習〉と〈数学〉の共通性を理解する。

第四節 知と存在と真理〈ロゴスの探究〉

【ロゴスによる〈有る・有らぬ〉の判定】

この節のポイント

パルメニデスのヌース（ロゴスを理解する能力）思想を理解するとともに、ロゴスによる世界解釈と常識による世界解釈の違いと、パラドックスの意義を理解する。

【原子（アトモン）と空虚—古代原子論】

リュキッポスとデモクリトスが「原子論」を唱えた理由を理解する。

第五節 “ソフィスト”

【徳は教えられるか】

この節のポイント

〈正しさそのもの〉と〈正しい事柄〉を区別して考察することの意義を理解する。

第六節 無知の知と知恵の愛求

【二種の《問う》こと】

この節のポイント

「何が～であるか？」という問いと「～とは何であるか？」という問いの違いを理解し、前者から後者の問いへの向け変えが真の哲学（教育）であることを理解する。

第七節 知とアイデア

【哲学者とアイデア】

この節のポイント

アイデアとそれを分ち持つものの区別と、アイデアを観る哲学者と分ち持つほうを見る哲学者以外の人の区別を理解する。

【太陽の譬喩—学ぶべき最大のもの】

善が、正義や美と異なってドクサが許されない理由を理解する。

【洞窟の譬喩—魂の向け変えと教育】

教育（哲学）を、魂を向け変えて善のアイデアを観ること、アイデアの明るさに慣れることとみなすプラトンの思想を理解する。

第八節 論理学の定位

【知の位相的分析】

この節のポイント

〈あらかじめ知ること（先知）〉には、〈我々にとってあらかじめ〉ということと〈本性においてあらかじめ〉の二種類があり、我々の認識は前者の知から後者の知へと移行することであることを理解する。

第九節 知性的徳の構図

【善と幸福＝最高善の探求】

この節のポイント

人間の本质と定義、すなわち、人間は、その魂が「ロゴス（理性・言葉）をもつところの動物（ゾー・オン・ロゴン・エコノ）」であるということ、の意味を理解する。

第十節 形而上学の世界

【驚異と哲学—“智者”の意味】

この節のポイント

アリストテレスによる「知恵がある」のランク付けとその規準を理解する。

【存在思想の基礎概念】

西洋の学的規定の軸となるアリストテレスによる存在概念の規定（原因、存在、実体、可能・現実、カテゴリー）を理解する。

第二課程 古典科学・中世カトリシズム・ルネサンス

第十一節 ログスの離散とヘレニズム哲学

【ストア学派】

この節のポイント

「ホモロゲイン」、「アパテイア」、「シュムパテイア」、の意味を理解する。

【エピクロス学派】

「アタラキシア」、「ラテ・ビオサス」、「アトム」と「死」の思想を理解する。

第十二節 ギリシア数理精神の展開〈アレキサンドリアの科学〉

【エウクレイデスの演繹的数学の体系】

この節のポイント

『原論』の構成と内容、論証体系（システム）の意義を理解する。

【アルキメデスの静力学—メーカネー思想】

「メーカネー」の意味と、アルキメデスの静力学思想の性格を理解する。

第十三節 古代自然学の完成〈ローマ期における応用と整備〉

【プトレマイオス宇宙像の形成】

この節のポイント

彼に先立つ古代天文学者の思想と、彼の天動説の内容を理解する。

【ガレーノスの生命・医療思想】

pneuma説に基づく彼の生命理論の伝統性を理解する。

【ローマ時代の“エンジニア”の概念】

「インゲニウム」の意味と、ルネサンスにおける「天才」の意義を理解する。

第十四節 ヘブライの宗教とイエス・キリスト

【知の様式としてのレリギオ（宗教）】

この節のポイント

ラテン語のレリギオの意味を理解する。

【ヘブライの信仰と知恵の思想】

ギリシア語のヘブライオイ（ヘブライ）の意味、ヘブライの神の性格と神と人間との関係の性格を理解する。

【イエスにおける啓示の理解—知・信仰・愛の同一性】

イエスにおける「時」、「天国」、「悔い改め」、「福音」の相互の関係を理解する。

第十五節 原始キリスト教と教父哲学

【原始キリスト教—パウロとヨハネ】

この節のポイント

パウロの「十字架神学」における〈犠牲〉と〈信仰〉の関係、ヨハネの「受肉神学」における〈ロゴス〉と〈神〉の関係について、それぞれの内容を理解する。

【キリスト教教理の組織化】

テリトゥリアヌスの「三位一体」思想を理解する。

【内観的自己省察—カトリック神学の基礎づけ】

アウグスティヌスの信仰の内面化による哲学との交流の内容を理解する。

第十六節 カトリシズムの成熟と近代の黎明

【信仰とラチオの一致】

この節のポイント

アンセルムスが「知を求める信仰」を問うことによって「スコラ学の父」とされることを理解する。

【アラビア科学のヨーロッパへの移入】

「中世ルネサンス」のアラビア科学とギリシア哲学のヨーロッパ流入を理解する。

【スコラ神学の完成】

トマス・アキナスによる「神学」と「哲学」の関係付けの作業を理解する。

【普遍論争】

「普遍実在論」と「唯名論」と「概念論」の内容を理解する。

第十七節 宇宙の数学的理念とルネサンス・フマニタス

【地動説の発動】

この節のポイント

ニコラウス・コペルニクスの地動説の特徴を理解する。

【普遍人と自由人】

レオナルド・ダ・ヴィンチの「知識は経験の娘」という考え方、ジョルダノー・ブルーノの自己を能動的に「無限」へと開放する考え方を理解する。

第十八節 宗教改革と近代精神

【教会改革思想】

ルターの信仰思想の核心（信仰のみ、聖書のみ、万人司祭主義）を理解する。

【ルターと近代精神】

「責め（内的抗議）」の自覚が近代哲学の自己意識の原点になることを理解する。

第三課程 科学革命と数学的理性の自己基礎づけ

第十九節 ガリレオ・ガリレイ〈自然の数学的投企〉

【誕生から思想準備期一ピサ時】

この節のポイント

古典科学の数理思想を内面化し、アルキメデスの静力学と運動論を数学の視点で結びつけ近代動力学の形成を準備したことを理解する。

【「自然の数学化」構想—『偽金鑑識官』】

「哲学は…我々の眼前に絶えず開かれているこの巨大な書物＝宇宙の中に記されている…それは数学の言葉で書かれている…」というガリレイの言葉の真意を理解する。

第二十節 ニュートン〈世界の数学的体系〉

【デカルトの諸学の統一の試み—『哲学の原理』】

この節のポイント

唯一の原理に基づく「普遍学」の構想と「哲学の樹」の譬喩の意義を理解する。

【西洋科学の記念碑—『プリンキピア』】

ニュートンの数学的自然認識の基礎概念（定義）を理解する。

【数学的世界の基本組成：「定義」・「注解」・「公理」（運動法則）】

プリンキピアの定義・注解・公理の内容を理解する。

【重力論的宇宙像の完成—「哲学の諸規則」】

「重力」が「万有」（万物）の究極原理とされたことを理解する。

第二十一節 デカルト〈形而上学についての省察〉

【デカルトの形而上学的動機】

この節のポイント

数学的なものの「絶対的で不動の基礎」を探求することを理解する。

【方法的懐疑—絶対的で不動の基礎としてのコギト】

「私は考える、故に私はある」が「数学的なものから純粋に定立された」「絶対的に不動の基礎」であり、哲学の第一原理（形而上学的基礎）とされることを理解する。

第二十二節 啓蒙理性の進展と先験的哲学の構想

【数学に基づく形而上学的世界観】

この節のポイント

スピノザとライプニッツによる世界の数学化の試みを理解する。

【啓蒙理性への批判—“自然へ帰れ”】

J・J・ルソーが理性を批判し自然的情操を重視する理由を理解する。

【経験的懐疑への途】

理性の経験的起源を強調するイギリス経験論の思想を理解する。

【『純粹理性批判』の構想】

カントが理性的形而上学から独断を排し、経験論から懐疑主義を斥けて、両者を適切に関係づけることを目指していることを理解する。

【人間的認識の二重構造】

カントにとって人間の認識が感性的直観と概念的思惟の二重構造を成していることを理解する。

【独断的形而上学批判とイデーの実践的意義】

理性にとってカテゴリーとイデーの意義が異なり、イデーが理性にとっての実践的課題であることを理解する。

第二十三節 ヘーゲル〈近代形而上学の構築〉

【『精神現象学』と弁証法的運動】

この節のポイント

知と真理の二重の契機をなす意識が、自体的⇒向自的⇒自体的・向自的という「弁証法的運動」によって「絶対知」へ上昇することを理解する。

【意識の諸形態—「精神の王国」】

感覚⇒知覚⇒悟性⇒自己意識⇒理性⇒精神⇒絶対知と変化する各契機の全体を弁証法的運動の視点から理解する。

第二十四節 ニーチェ〈形而上学的世界の転倒〉

【ニヒリズムの諸相】

この節のポイント

「一切の価値の価値転倒」＝「積極的ニヒリズム」の意味を理解する。

【力への意志】

「“～である”という信仰を“～に成るべきである”という意志へと変化せしめること」の意味を理解する。

【「ディオニュソス的なもの」と「アポロ的なもの」】

ニーチェが挙げているそれぞれの内容と意味を理解する。

【悲劇の没落—ソクラテスによる学知の形成】

ギリシア「悲劇の没落」に際して、ソクラテスが果たした役割を理解する。

第四課程 実証・論理と現象学

第二十五節 実証と経験の精神

【「知は力なり」】

この節のポイント

F・ベーコンが学知の意義を実効性に置き、自然を支配する力を獲得する方法を構想したことを理解する。

【帰納法とイドラ】

「種族」「洞窟」「市場」「劇場」の四種類のイドラの内容を理解する。

【“人は人に対して狼”】

ホッブズの、感覚主義的「自然権」認識に基づく「社会契約」思想を理解する。

【近代政治理念の形成】

J・ロックの「自然状態」理解がホッブズと異なっている点を理解する。

【古典経験論の完成】

D・ヒュームの、「習慣」を重視する経験論の特徴を理解する。

第二十六節 進化論の変遷

【ダーウィニズムの影響】

この節のポイント

本来のダーウィニズムと、ナチズムなどにおける優性思想との違いを理解する。

第二十七節 功利主義とプラグマティズム

【最大多数の最大幸福】

この節のポイント

功利主義が、自然法に基づく「社会契約説」ではなく功利性（幸福の平等な分配）を原理としていることを理解する。

【プラグマティックな格率】

結果を重視することを意味するプラグマティズムが、「道具主義」と「実験主義」の性格を有することを理解する。

第二十八節 言語・論理・分析

【数学的論理学の端緒】

この節のポイント

現代の数学的記号論理学がイギリス実証的经验主義とライブニッツ「結合法」に由来し、19世紀の「数学基礎論」を経て形成されてきたことを理解する。

【“哲学の仕事”の変容】

ヴィトゲンシュタインの前期思想における「理想言語」を抽出する作業行程と、後期思想における「言語遊戯」と「認識の病の治療術」の内容を理解する。

【論理実証主義—人工言語学派と日常言語学派】

人工言語学派と日常言語学派の違いと、共通の課題を理解する。

第二十九節 現代知識論と科学哲学の視点

【パラダイム論—『科学革命の構造』】

この節のポイント

「パラダイム」の意味と、「科学革命」におけるその変換の出来事を理解する。

【反証可能性としての科学性—『推論と反駁』】

「反証可能性」と「合理性」の意味を理解する。

第三十節 学知の発生論的究明としての現象学〈知の根源への回帰〉

【現象学の意味】

この節のポイント

フッサールが「現象学」を、「心理的事実」に関する学ではなく、「意識経験」或いは「純粹意識の体験」に関する学と考えていることを理解する。

【事実学・本質学・形相学】

事実学と本質学と形相学の内容と関係と、その関係の要点が「本質直観」であることを理解する。

【先験的還元】

「本質直観」の様態を明らかにする最初の作業が「自然的意識」の反省（広義の現象学的還元）であり、先ず先験的還元（狭義の現象学的還元）によって「純粋な意識体験」を取り出すことを理解する。

【形相的還元】

純粋意識を「ノエシス（実的要素） - ノエマ（観念・意味的要素）」の二重構造において説明している内容を理解する。

【学の危機と理性への懐疑】

19世紀後半におけるヨーロッパにおける学の危機が、「理性」への懐疑に通じていることを理解する。

【「意味の空洞化」】

「意味の空洞化」が、理性の意味の充実機能の欠如に由来し、それが「専門化」を招来することを理解する。

【生活世界の現象学】

「純粋自我」を「根源我」と言い換え、「相互主観性」という概念を提示した理由を理解する。

【現存在分析】

ハイデッガーの「世界 - 内 - 存在」、「存在理解」、「現存在」、「実存」といった概念の内容を理解する。

【実存主義運動】

この節のポイント

キェルケゴール、サルトル、ヤスパースの各々の実存思想の特徴を理解する。

【省察的思惟の回復】

「計算的思惟」と「省察的思惟」の違いを理解する。

【知の故郷としての詩作との対話】

「民族の詩」＝神話との対話が思惟の使命とされることを理解する。

【結び】

世界的な情報ネットワークが支配する現代において、“知への注意を怠るな！”の警告のもつ重大な意味を理解する。